



## カリフォルニアでの2年間

### ただただ圧倒された 黄金時代真っ只中のアメリカ

1962年4月、家内と共に生まれて初めて乗った飛行機から、日の暮れたサンフランシスコ空港に降り立った私は極度の緊張の中にいた。空港からカイザーアルミの本社のある街、オークランドへ向かって4車線の堂々たるハイウェイを走り、ライトに煌々と照らされたベイブリッジを渡る。話や映画と違う、この眼で見たアメリカのスケールの大きさに、東京オリンピック前の発展途上国、日本から来た私はただ圧倒された。

それから約2年間、私の仕事は昭和電工、カイザーアルミ、八幡製鉄の3社（SKYは3社のローマ字の頭文字）によるアルミ圧延会社の設立構想の連絡役。写真はヨセミテ国立公園へ

家内とドライブした時。車は私とトレードで日本駐在となったカイザーの社員から譲り受けたシェヴォレー・インパラ。中古車だがとにかく大きい。エンジンをかけると轟音と共に走り出す。免許証をとった家内は、ハンドルの輪の内側から必死に前方を覗いて運転していた。

もう一葉は我々の送別会でカイザーの仲間たちと。東部のヤンキーとも違う、カリフォルニ



**大橋 光夫**  
昭和電工 取締役会長

ア育ちの明るく素朴な面々が今でも忘れられない。

滞米中に起きた世界を震撼させる事件は2つ。ひとつは'62年のいわゆる「キューバ危機」。次いで、'63年、ダラスでの「ケネディ大統領暗殺」。ニュースを聞き、拳を振り上げる男たち、涙を浮かべる女たち。しかし、いずれの時も、彼らの反応には自国に対する揺るぎない自信がその根底にあった。ソ連との冷戦は続き、ヴェトナム戦争が始まっていたものの、'60年代初頭のアメリカは文明を謳歌し、希望に満ち溢れ、そして治安も良く、まさに世界中が憧れた黄金時代の真っ只中にあった。

帰国後、滞米中の縁で新会社スカイアルミには'64年の設立時から参加したが、米国企業と米国人の価値観、経営哲学など、私が学んだ財産は計り知れない。使い物にならなかった私にカイザー行きを命じた会社と当時の安西社長には今でも感謝している。

私の思い出写真館